

平成26年度千葉県水産振興審議会栽培漁業・資源管理部会

議 事 概 要

日時 平成27年1月28日(水)

午後1時30分から午後3時20分まで

場所 千葉県教育会館 6階 608会議室

○協議事項

- (1) 水産動物の種苗の生産、放流及びその育成に関する平成26年度実績について
このことについて、資料1により漁業資源課、水産総合研究センター及び公益財団法人千葉県水産振興公社(以下、「振興公社」という。)から説明があり、その後、以下のとおり協議が行われた。

・質疑概要

委員：ヒラメの体色異常は無くなるのか。

水産総合研究センター：ヒラメの体色異常は、放流が始まった当初からの課題で、かつては大学や国の研究機関がプロジェクトで取組をしていた時もあったが、解決されていない。そういう中でも原因が少しずつ分かり、解決に向けて研究を進めているところであり、ゆくゆくは無くしたいと考えている。

- (2) 第7次栽培漁業基本計画(水産動物の種苗の生産及び放流並びに水産動物の育成に関する基本計画)について

このことについて、資料2により漁業資源課から説明した。以下のとおり協議した結果、部会としては、原案のとおり了承することとなった。

・質疑概要

委員：新規対象種としてトラフグが入っているが、国が開催している検討会などの流れを受けて新規対象種としたのか。

漁業資源課：その流れを受けたわけではない。千葉県では、トラフグは豊凶の激しい魚種であるが、特に内房から外房にかけての沿岸漁業者が、釣り、はえなわで漁獲し、漁業収入の向上に役立っている。そこで、他県で比較的效果が得られている種苗放流により、漁獲を安定させ、漁業者の収入増に繋げたいと考えている。

委員：マダイ、ヒラメの放流量の増加は、どのように行うのか。

漁業資源課：県が健全な種苗を生産し、振興公社が安定的かつ効率的な中間育成を行い、全体的に技術水準が向上している。次期計画については、県は引き続き健全種苗の生産に取り組むとともに、振興公社が中間育成技術開発に取り組むことにより、より効率的な生産育成体制を構築し、施設や経費を増やすことなく放流尾数を増やしたいと考えている。

委員：新規対象種のバイは、漁業者から強い要望があったのか。また、技術開発にどのように取り組むのか。

漁業資源課：バイは砂泥域に生息する巻き貝で美味であり、高値で取り引きされており、漁獲が増えた際には漁業者の収益増が期待される。バイは、盤洲域、内房、外房や主産地の九十九里で、かつて数10トン獲れていたが、船底塗料に含まれていた有機スズの影響で生殖器に異常が生じて資源が激減した。この時、漁業者から養殖技術開発の要望があり、水産総合研究センターで小規模の種苗生産技術を概ね確立したが、様々な要因で養殖は実現しなかった。

2001年に国際条約で船底塗料として有機スズの使用が禁止され、最近、千葉県でもバイの漁獲が増加傾向にある。種苗生産の先進県である鳥取県では、種苗量産を行い、右肩上がりバイの生産量が増えている。天然資源の再生産を待って資源を増やすことも考えられるが、増加傾向にあることから、この段階で種苗生産・放流を行うことにより、資源の再生のスピードを一層上げ、早く沿岸漁業者のお役に立てればと考える。

生産技術としては、かつて開発した基礎技術を活用するとともに、鳥取県から量産技術を導入し、本県でもできるだけ早期に量産技術を確立したい。

委員：トラフグの技術開発はどのように取り組むのか。

漁業資源課：トラフグは広域で取り組んでいる魚種であり、量産技術は概ね確立しており、県ではその技術を導入したいと考えているが、その前に、放流効果を検証したいと考えている。

そこで、来年度は他県から種苗を購入して育成し、標識放流を行い、放流効果を確認したいと考えており、放流効果が見込めることを確認できた後、直ちに量産に取り組んでいきたい。

委員：広島でトラフグの種苗放流を行ったが、中回遊魚種であることから、広島で放流しても玄界灘や東シナ海で獲られることが多く、広島で獲れるのは、放流直後のまだ成長していないものであった。回遊経路を調べた方が良い。

漁業資源課：その点について、まずは標識放流を行って確認したいと考えている。トラフグは暖流性の魚種であることから、本県沖がトラフグの回遊の北限にあたり、東海地方からやってきたトラフグを本県漁業者が獲っている状況と考えられる。想定としては、東京湾で放流したものが砂泥域で成長し、県内各地で漁獲されることを想定している。委員の意見を参考に確認しながら進めていく。

委員：天羽沖のトラフグの漁獲状況はどうか。

委員：トラフグを専門に獲っている人の数は少ないが、昨年頃から神奈川県で放流したと思われるタグ付きのトラフグが金谷で上がっている。千葉県でも放流すれば相乗効果が期待できると考える。

委員：たしか城ヶ島でトラフグの種苗放流をしている。

委員：単価が良いものに取り組んでももらいたい。ただし、バイの単価が1,500円/kgとあったが、そんなに高くない。原因は大きさなのか、産地によるものなのかは分からない。

委員：マダカアワビは器械根での放流効果が思わしくない中、生産に向けて技術開発を進めるのか。漁協では、今後、輪採漁場をさらに整備する計画であり、クロアワビの放流数量が増える見込みであることから、クロアワビを主体に生産してもらいたい。

漁業資源課：クロアワビとメガアワビは、県の委託により振興公社が生産し、漁業者に配布しているところだが、マダカアワビは水産総合研究センターにおいて技術開発に取り組んでおり、施設などが重複している訳ではない。

またクロアワビとメガアワビの計画数量は、施設の都合もあって160万個と変更ないが、振興公社では計画以上の生産に努めており、購入量を増やしたい意向であれば、輪採漁場による増加量も勘案しながら相談していきたい。

(3) 水産動物の種苗の生産、放流及びその育成に関する平成27年度計画について

このことについて、資料3により漁業資源課、水産総合研究センター及び振興公社から説明があり、その後、以下のとおり協議が行われた。

・ 質疑概要

委員：ヒラメの放流種苗について、サイズが小さいなどの意見はないのか。

水産総合研究センター：現在、ヒラメは全長80mmで放流しているが、放流サイズの大型化に係る要望は、生産現場には聞こえていない。種苗生産は、自前の養成親魚から採卵した卵で行うよう取り組んでいる。

(4) 資源管理型漁業の推進について

このことについて、資料4により漁業資源課から説明した。

○報告事項

(1) 平成26年度の資源管理型漁業に関する事業等実施状況について

このことについて、資料5により水産総合研究センターから報告があった。

(2) 水産基盤整備事業に係る平成26年度事業実績及び平成27年度事業計画について

このことについて、資料6により漁業資源課から報告した。

(3) 公益財団法人千葉県水産振興公社の平成26年度事業実績及び平成27年度事業計画(案)について

このことについて、資料7により振興公社から報告があった。